



発行 真宗大谷派 高山教務所
 発行者 出雲路 善公
 〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
 ☎(0577)32-0776
 *毎月20日発行 50,000部
 三市一郡無料配布
 印刷 山都印刷株式会社

念じられ 照らされて

見失われた大地

名和達宣



〔略歴〕
 一九八〇年、兵庫県生まれ。親鸞仏教センター研究員を経て、現在、真宗大谷派教学研究所研究員。西田幾多郎・清沢満之を中心に近代日本思想史を研究。

一昨年の夏、東京に住んでいた時の話である。いわゆる安保法案が可決されるかもしれない、ということ、全国各地でデモが起こり、特に都内は大盛り上がりだった。毎日どこかで集会が催され、インターネットで調べれば、気軽に参加できる場をすぐに見つけることができた。

妻と相談した結果、二歳の娘と三人で反対デモに参加することにした。居ても立ってもいられたのである。賛成反対の域をこえ、この国に子どもの将来を託すことができるのか、と問いたい気持ちに駆られた。

一昨年の夏、東京に住んでいた時の話である。いわゆる安保法案が可決されるかもしれない、ということ、全国各地でデモが起こり、特に都内は大盛り上がりだった。毎日どこかで集会が催され、インターネットで調べれば、気軽に参加できる場をすぐに見つけることができた。

今から七十余年前、太平洋戦争の只中で、日本全体がこの大地を見失っていると警鐘を鳴らした人物がいる。

——鈴木大拙。昨年、没後五十年を迎えた世界的仏教者である。当時の軍部が宣揚する日本精神に対し、「日本の霊性」の復興をうたったえ、同名の書を世に出した。

「土」による救済を説く仏教であり、親鸞聖人は「悲願は：なご大地のごとし」(『教行信証』「行巻」)と、悲願を大地に喩えている。それは三世十方の如来(諸仏)を生み出す根源であり、一切衆生の往生を支える立脚地である。ならば大地を見失うとは、あらゆる存在を悲しみ傷む如来の悲願を忘れることにほかならず、ひいては往生の路途に迷うことを意味するだろう。

『日本の霊性』角川ソフィア文庫・64頁

「霊性」とは人間存在の深さを表す語であるが、大拙は敗戦という危機的状況を前にした日本国民に対し、その自覚が欠如していると、つまり根を下ろすべき大地を見失ったまま、どこか途方もない方向へ進もうとしているのではないかと呼び止めたのである。

「根を切れた」という痛みをよすがとするよりほかに道はないのだが、日頃の生活を顧みるに、他者への批判に明け暮れ、自己の立場や正義のみを主張する我々には、もはや切れる根すら存在しないように思われる。しかし、そのような「根をもたぬ」現実を悲しむ心こそが、かえって大地を感覚する契機となるのではないか。根のないところに発起する不可思議な信心を、浄土真宗では「無根の信」と呼んできた。

自己の救済も、非戦平和も子どもの将来も、託すことができるのはただ大地である。

ある「赤本」とページ数を合わせ、ことばの意味や解説も取り入れています。本を開けばそこに真宗の教えが身近に感じられるものとなっていると思います。

現代語訳に際し、様々な試行錯誤を繰り返しながら教えられたことは、やはり親鸞聖人、蓮如上人という方々のおことばはそのままだくことが最もふさわしいのではないかと、ということです。変化してやまないこの時代に、かえって、おつとめのことばに直接接触し直していくことの大切さ。今後さらに、時代の人々に響く、意欲ある翻訳がなされていくことでしょう。この現代語訳を通して、親鸞聖人、蓮如上人のおこころに帰っていく手がかりとしていただくことを願わずにはおれません。

「生活の中に念仏があるのではない。念仏の中に私たちの生活があるのです。」(宮城顕)

ある真宗門徒の方が「毎晩のおつとめをすると、うれしいことがあった日はうれしいおつとめになり、悲しいことがあった日は悲しいおつとめになるんや」と話してくださいました。真宗門徒の生活の基本として、『正信偈』に日々触れ直していきましょう。

※この赤本「現代語訳」(『正信偈同朋唱和集』)は、「飛驒御坊御遠忌750」のご懇志記念品として発行されます。

飛驒御坊 御遠忌通信 ⑥

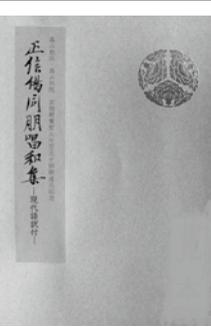
「赤本」現代語訳を終えて 正信偈って、何が書いてあるの?

『正信偈』のおつとめは、今から550年ほど前、蓮如上人によって始められ、以来真宗門徒の日常の作法として続けられてきました。親鸞聖人の作られた「偈文」(漢文のうた)と「念仏」と「和讃」(七五調の日本語のうた)に節をつけて調べ、蓮如上人の『御文』(手紙)が添えられています。これまで、お寺の本堂や家庭の「お内仏」で、朝夕、あるいはお通夜、報恩講などの法座で、みなで行うこの唱和が生活の基本となってきました。

しかし近年、そのことばの意味やところを訪ねていく機会は次第に減り、また念仏の声も聞かれなくなってきました。

60年の長きにわたり、宗門のロングセラーとして用いられ、親しまれてきたお勤め本(通称「赤本」)。そこに何が書かれているのか、今一度確かめたい。こうした中、本山での「宗祖親鸞聖人750回御遠忌」に合わせ、この飛驒の地での「お待ち受け」事業として現代語訳が進められてきました。

着手から10数年たった今、ようやく形を整えることができました。今



☎テレホン法話(0577)34(2313) ○8月21日〜31日:小長谷智行氏「大徳寺」 ○9月1日〜10日:橋和子氏「妙覺寺」 ○9月11日〜20日:上清水信男氏「西蓮寺」 宗教トラブルFAX相談窓口(0577)3210763

女と男の

ナムアマミダブツ ⑱

藤場 芳子



「いたずら」と「まかさな」で性犯罪

「神話」とは

「神話」と聞いたなら、何を思い起こすでしょうか。ギリシャ神話や古事記をあげる人がいるかもしれませんが、辞書によれば二つの意味があるようです。一つは「古くから伝えられた神を中心とする物語」のこと、もう一つは「根拠がないのに誰もが信じている事柄」です。えっ、そんなことってあるの？と思うかもしれませんが、実は私たちの周りにはそういう神話が結構あるのです。

強姦神話

その一つに「強姦神話」があります。ドキッとさせる言葉です。強姦とは何かというと、女性（少数ですが、男性の場合もあり）の意思に反して合意なしに性行為をすることです。一体どんな神話なのかというと、①男性の性欲はコントロールできないから、挑発した女性が悪い。例えば、胸元の大きく開いた洋服を着ているのがこれにあ

たります。②女性がノーと言っても実はイエスだ。単にじらしているだけだというわけです。③本当にイヤなら最後まで抵抗するはずで、そうしないのは合意だったに違いない。

残念なことこれらの方が多いので、落ち度があったのは自分だと被害者が自らを責め、加害者を告発することを困難にしています。たとえ勇気を振り絞って告発しても、警察の尋問や法廷でのやりとりで「あなたにも落ち度があったのではないですか」と言われて、被害者が再び傷つけられることにもなりかねませんし、インターネットでは面白半分に取り上げられたりもします。

断れない関係で

今回の句は「いたずら」とごまかさなで「性犯罪」です。強姦事件があっても、新聞やテレビのニュースではそれがいたずらや乱暴・婦女暴行などと表現されることがあります。そういう婉曲な表現を使うことがかえって強姦の実態を軽く扱ったり、歪曲したり、隠したりするのではないかとこのことを指摘しています。最近、レイプという英語を使うのも、強姦だときつ過ぎるのを避けるためかもしれません。

20代前半で職場の上司にレイプされたというつらい過去をもつある女性は「やっと就いた仕事を失うかもしれないと思って、頭が真っ白になり抵抗できなかつた」と語っています。職場の上司と部下、あるいは大学の教授と学生という、教える・教えられる関係がノーと言いくい状況を作っていると云えます。強姦は暗い夜道で見知らぬ男性によって起こされるといっても神話で、実際には加害者の75%は被害者

と知り合いだと言われています。

誰もが当事者

「男はみんなオオカミだつて言うけど、オオカミは一夫一婦制で添い遂げる生き物だよ。男同士でお酒を飲んだ時に、いわゆる性的なサービスのお店に行こうと誘われることがあるけど、僕はイヤだ。男はみんな〇〇つて言つて欲しくない」とある男性が言いました。なるほど、確かに男性をひとくくりにして言うのはおかしいですね。それと同じように、例えば「女性は受け身だ」とひとくくりには言えないでしょう。

『男性神話』という本には戦場における日本兵と慰安婦の関係のありようが書かれています。著者である彦坂諦さんは、私たちの平和な日常生活での男と女の関係が戦場に集約されていると言っています。つまり戦場でのことは過去の出来事ではなく、今も日常で起きているし、他人事ではなく誰もが当事者だということなのです。

心の行為

仏教では行為のことを業と言ひ、体でする身業、口で言う口業、心で思う意業の三つに分けます。身業と口業は見たたり聞いたり触ったりすることができまますが、意業は表面的に出てきません。けれども心の行為である意業が身業や口業の根本にあると仏教では言われています。今まで性に関する心の行為はあまり正面から取り上げられることはなかったように思います。誰の中にもある「神話(根拠のない思い込み)」。一緒に考えてみませんか。

次回は酒井義一さんの「私を照らすひかりの言葉⑳」です。

「壇案内」

Table with 2 columns: 8月 (August) and 9月 (September). Lists dates, days of the week, and temple names for various events.

「坊文化講座」第2回

Table with 2 columns: 日時 (Date/Time) and 会場 (Venue). Details for the 'Autumn Lecture: Eitai Kyōhō'.

児童夏のつどいin長圓寺 7月25日~26日 自然がいっぱい！朝日の夏！



ハイキングでおおはしゃぎ

毎年たくさんの応募をいただいている「児童夏のつどい」。今年は朝日町小谷の長圓寺で開催されました。今年のテーマは「あそぶ・つくる・であうー本当に大切なこと」。蓮乗寺(高山市若達町)のご住職・細川宗徳さんに将棋の駒の役割を題材に、金になるということや、本当に輝くってなんだろう？ということをお話をしていただき、みんなで考えました。一日目は雨が降り、みんな楽しみにしていた川遊びができず残念がっていましたが、小学校の体育館でおにごっこなどのゲームをしたり、自分たちで火を起こしてカレー作りをしたり...初めて会う友達とみんなで楽しく過ごしました。二日目はウォークラリーをして、ゴール地点の牧場でお馬さんやうさぎさんたちにご飯をあげました。最初はみんなこわがっていたけれど、かわいい動物たちと仲良く遊びました。

★子どもたちの感想★

- 初めは知らない人ばかりであまり話をしなかつたけど、いっしょにゲームをしたりカレーを作ったりしているうちに友だちになれうれしかったです。
よるの時間にみんなで今日きいたおはなしのことをかんがえてはなしました。
「石ころのまま金になれる」というはなしがふしぎだと思った。みんなが金だったら気持ちわるいと思うし、石が金になるというのはそれぞれの個性ということがわかり大切だと思いました。
お話をきいて自分のなまえ、友達のなまえは大切だと思いました。
ねる時間になってもお寺でねるのでこうふんしてねむれませんでした。
ハイキングのクイズはむずかしかったけど、最後はとけてたのしかったです。
動物にエサをやるのがこわかったけど、いっしょうけんめいたべていてかわいかったです。
去年やおとしよりもずっとずーっと最高の夏のつどいでした。



定例法座・法話(午後1時から) ○8月21日(月)：伊達俊幸氏「稱讃書」 ○8月27日(日)：出雲路善公輪番 ○8月28日(月)：細川宗徳氏「蓮葉書」 ○9月1日(金)：三枝正尚氏「随縁書」 ○9月11日(月)：出雲路善公輪番 ○9月13日(水)：竹田雅文氏「東等寺」